親鸞の涅槃経観

林　智康

大乗涅槃経には、漢訳経典として『大般泥洹経』六巻、『大般涅槃経』（北本四〇巻、南本三六巻）、『大般涅槃経後分』二巻がある。この中で親鸞が依用したものは『大般涅槃経』の北本と南本である。北本は北涼の曇無讖が訳し、一三品四〇巻から成る。又南本は宋の慧厳・慧観・謝霊運等による北本の再治本で、これは『大般洹泥経』を参照し、品名を細かく分け、字句にも多少の修正を加えて二五品三六巻と成っている。

親鸞の著述における『涅槃経』の引用をみると、『大般涅槃経要文』[1]に一六文、『見聞集』[2]に一五文、『教行信証』に三三文引かれており、『浄土和讃』の諸経讃の中四首が『涅槃経』の意によっている。『大般涅槃経要文』は北本（旧宋版）、『見聞集』は南本（高麗版・宋版）により、そして『教行信証』は北・南の両本が混入している。『教行信証』の『涅槃経』引文は、『大般涅槃経要文』と同じものが六文、『見聞集』と合うものが一一文あり、残り一六文は別な引文である。巻別にみると、行巻に四文、信巻に一二文、真仏土巻に一三文、化身土巻に四文引かれ、又坂東本の別序の前には、阿闍世王に類する五逆罪を犯した諸王の名が記されている。

親鸞は教巻に「夫顕二真実教一者、則『大无量寿経』是也。」と『大無量寿経』を真実の教と述べている故に、当然この経の引用回数が三八回と最も多いことは理解できる。しかし浄土教典でない『涅槃経』を何故このように多く引いたのであろうか、以下その理由を列挙する。

一、『涅槃経』は釈尊一代の結経であり、諸経の説を追説という伝統的見方に随っている。即ち『涅槃経』には、『阿含経』・『般若経』・『首楞厳経』・『法華経』（『華厳経』のこと）・『如来秘蔵経』（『如来蔵経』のこと）の経名を出し、又『阿閦仏国経』・『大無量寿経』・『維摩経』等の思想も含まれている。この経において「如来常住無有変易」、「一切衆生悉有仏性」を説くことは、『法華経』の「授記作仏」や「寿量開顕」、『如来蔵経』の「如来蔵」を説くよりも、よく詳しく現実的

である。

二、『涅槃経』は浄土教典の『大無量寿経』や『観無量寿経』の内容と相通じる特徴を持つ故に、『涅槃経』を浄土教典に準じた取扱いをしている。その例を挙げると、

(1)、行巻の一乗海釈に『涅槃経』三文と『華厳経』一文を連引し、その後の御自釈に、「爾者、斯等覚悟、皆以安養浄刹之大利、仏願難思至徳也。」と述べている。

(2)、信巻（末）の逆謗摂取釈の『涅槃経』四文連引後の御自釈に、「是以、今拠二大聖真説一、難化三機、難治三病者、憑二大悲弘誓一、帰二利他信海一、矜二哀斯治、憐二憫斯一療。喩如二醍醐妙薬療二一切病一、濁世庶類、穢悪群生、応二求二念金剛不壊真心一、可二執二持本願醍醐妙薬一也。応レ知。」と述べている。

(3)、真仏土巻の結釈では『涅槃経』の文を入れて、「爾者、如来真説、宗師釈義、明知、顕二安養浄刹真報土一、惑染衆生、於レ此不レ能レ見レ性、所レ覆二煩悩一故。『経』言四「我説二十住菩薩少分見二仏性一。」故知、到二安楽仏国一、即必顕二仏性一。由二本願力回向一故。亦『経』言下「衆生未来具三足荘二厳清浄之身一、而得レ見二仏性一。」と述べている。

又、『浄土和讃』の中の「諸経のこころによりて弥陀和讃」という九首の和讃中、四首は実に『涅槃経』によつている。

三、天台の一乗と法相の三乗の間の仏性論争に対する親鸞自身の見解を述べている。これは源信の『一乗要決』の影響が大きい。又源信には浄土教に関する著述として『往生要集』がある。ともに『涅槃経』が引かれ、『一乗要決』には七七文、『往生要集』には三三文ある。『一乗要決』と『教行信証』の『涅槃経』引文を比較すると六文合い、又『往生要集』と『教行信証』とを比較すると五文合う。特に『一乗要決』の第六大門遮二無性有情実有執一のところに現病品の三種病人の譬喩がそのまま引かれている。『往生要集』は念仏の実践を讃仰する実践的著述であるが、『一乗要決』は一乗仏性思想の玄意を述べる理論的著述である。源信は『一乗要決』に、中国の法宝と慧沼、日本の伝教と徳一等の仏性論争を詳述し、『法華経』と『涅槃経』を引用することによつて、一乗真実・三乗方便を論理づけている。

ここで法然の経典観をみると、『法華経』に対しては、『念仏大意』[4]や『念仏往生要義抄』[5]等に凡夫に親しみのない経典と言つている。又『涅槃経』に対しては、『逆修説法』[6]に、「凡諸経中、或有レ説二往生浄土法一、或有レ不レ説。『華厳経』已説レ之、即『四十華厳』中普賢十願是也。『大般若経』中、総不レ説レ之。『法華経』中説レ之、即薬王品即往生安楽世界文是也。『涅槃経』中亦不レ説レ之。」と、『涅槃経』には往生浄土の法が説かれていないと述べている。

親鸞の『教行信証』においては『法華経』の正引は見られ

ず、信巻（末）の王日休の『浄土文』[7]に、又証巻の菩薩荘厳四種を明す『論註』[8]の文中に、各々子引が見られるだけである。ところが『涅槃経』は『大無量寿経』に次いで多く引かれている。従つて親鸞は法然の法華経観を継承しているが、涅槃経観ではむしろ源信からの影響が考えられる。

四、五逆罪を犯した阿闍世王や一闡提を、親鸞は自己自身の上にみた。従つて如来の本願は正しく自己の救済をめあてとするものとして受けとつた。

(1) 『教行信証』坂東本の別序の前に五逆罪の諸王の名が列記されている。即ち「復有二一臣一名二悉知義一　昔者有レ王名曰二羅摩一害二其父一得レ紹二王位一　跋提大王　毗楼真王、那睺沙王　迦帝迦王　毗舎佉王　月光明王　日光明王　愛王　持多人王　如レ是等王　皆害二其父一得レ紹二王位一　然无下一王入二地獄一者上　於二現在一毗溜璃王　優陀邪王　悪性王　鼠王　蓮華王　如レ是等王皆害二其父一悉无下一王生二愁悩一者上」と述べ、信巻（末）引用の梵行品の中にあるこの部分を特に取り出している。

(2) 自己の名の上に「愚禿」と自称する。『教行信証』各巻の選号はじめ、総序、別序、後序、信巻（末）逆謗摂取釈の前、化身土巻（末）三願転入の前とすべて重要箇所にみられる。『涅槃経』では、謗法者や餓鬼のために出家するものを「禿人」とか「禿居士」と呼んでいる。

(3) 『涅槃経』原文の意味を訓みかえたり、省略して、親鸞独自の引用態度がみられる。

〈信巻（末）現病品の引文〉

(A) 迦葉世有二三人一其病難レ治　一謗大乗二五逆罪三一闡提如レ是三病世中極重　悉非二声聞縁覚菩薩之所一能治一　善男子譬如二有レ病必死難レ治　若有二瞻病随意医薬一若無二瞻病随意医薬一　如レ是之病定不レ可レ治　当レ知是人必死不レ疑　善男子是三種人亦復如レ是＊　若有二声聞縁覚菩薩一或有レ説レ法或不レ説レ法　不レ能レ令二其発二阿耨多羅三藐三菩提心一三一則不上可レ差　声聞縁覚亦復如レ是従二仏菩薩一聞レ法已即能発二於阿耨多羅三藐三菩提心一非二不レ聞レ法能発心一也

(C) 迦葉譬如下病人若有二瞻病随意医薬一若無二瞻病随意医薬一皆悉可上差……

(A′) ……善男子譬如下有レ病必死無レ治　若有中瞻病随意医薬上若無二瞻病随意医薬一　如レ是之病定不レ可レ治……

(A)(B)(C)は三種病人の譬えを述べているが、親鸞は(B)にある文（傍線の文）を(A)に入れ（＊印の個所）、又独特な訓点を施して（(A′)の文）、(A)の原文の意を変えている。原文では看病人と医師と医薬の三者があると否とにかかわらず、第一種の病人（謗法・五逆・一闡提）は必死不可治のものであるという意を、看病人と医師と医薬がなければ不可治であるが、それが

あれば不可治でないとした。その結果第一種(A)の病人のことを説いたこの文が、第二種(B)の病人のことを説く文と同じ内容になつている。従つて謗大乗・五逆罪・一闡提は仏力によつて発心が可能になるのである。

〈真仏土巻迦葉品の引文〉

或有レ説言三犯四重禁作五逆罪一闡提等皆有二仏性一（或説云無）原文には「皆有仏性」とある次下に「或説云無」の句があるが、親鸞はこれを略して、一切衆生悉有仏性説を強調している。

右に引いた現病品や迦葉品を親鸞は全く原文の意と異つて解釈したが、その理論的根拠として次のことが考えられる。

㋑　現病品の文において、二乗は仏・菩薩により法を聞いて発心するが(B)、一闡提等は三乗人によつて発心しない(A)、とある。しかし仏力によつて二乗の発心が可能ならば、同じ仏力によつて一闡提等の発心も可能になると解釈できる。

㋺　『大般涅槃経』一部において、初めの『大般泥洹経』に相当する部分は、一闡提は全く成仏不能の機とされているが梵行品の辺より、一闡提の罪を究明するとともに、大慈悲の菩薩精神に立脚して一闡提に対する救済を述べている。即ち『涅槃経』は一闡提不成仏から一闡提成仏へと展開している。

以上述べてきた如く、親鸞が『涅槃経』を重視した理由として、①『涅槃経』は釈尊一代の結経である。②『涅槃経』は浄土教典に準じている。③仏教教学史上注目されてきた仏性論争に対し、親鸞自身の見解を『涅槃経』によつて述べる。④『涅槃経』に説かれる五逆・謗法・一闡提等の難化の三機を自己の上にみられ、救済の可能性を述べる。等の四つが考えられる。

1　真宗聖教全書五巻・六八頁、親鸞聖人全集六巻写伝編二・一五一頁。
2　親鸞聖人全集六巻写伝編二・一二九頁。
3　恵信僧都全集二巻・一二〇頁。
4　真宗聖教全書四巻・二二二頁。
5　同　上　四巻・五九〇頁。
6　同　上　四巻・四三二頁。
7　同　上　二巻・七九頁。
8　同　上　二巻・一一八頁。

《参考文献》国訳一切経涅槃部一解題　常盤大定氏、同二解題　横超慧日氏、日本浄土教思想史研究　普賢晃寿氏、「親鸞聖人と涅槃経」（大谷大学研究年報第二輯）安井広度氏、「親鸞聖人の読経眼―涅槃経三病人について―」（親鸞聖人論攷第三号）横超慧日氏、「親鸞聖人の涅槃経観」（真宗研究第五輯）土橋秀高氏、「親鸞聖人と涅槃経」（竜谷大学論集第三六五・三六六合併号）土橋秀高氏。